

『細雪』論

— 消滅する文化 —

姜 智 允*

(e-mail : 99june@hanmail.net)

< 目 次 >

- | | |
|------------|-------------|
| 1. はじめに | 4.1. 東京への栄転 |
| 2. 消滅された空間 | 4.2. 本家の移住 |
| 3. 消滅の背景 | 4.3. 残された分家 |
| 4. 家の消滅 | 5. まとめ |

キーワード：蒔岡家(Makioka Family), 船場(Senba), 消滅(Destroying), 昭和恐慌(Showa financial crisis), 明治民法(Meiji Civil Code)

1. はじめに

谷崎潤一郎の代表的な長編小説である『細雪』は1942年に月刊誌『中央公論』で連載されたが、時局にそぐわないとして翌年に連載が中止された作品である。最終的には敗戦を経て、1948年に完成されたこの作品は、直ちに高い評価を得ており、日本の近代文学史においても代表的な長編小説としての位置を占めている。大阪の船場で「旧幕時代からの由緒を誇る」店舗を営んでいた蒔岡家の四姉妹の日常を詳細に描いた作品で、三女雪子の縁談の出来事と四女妙子の恋愛の出来事を軸に物語は構成されており、姉妹の華麗で優雅な日常を描いた作品として評価されている。その華やかな内容から戦時中という時局にそぐわないとして軍部から幾度も弾圧を受けたとされ、にもかかわらず、疎開中も毎日執筆し続けた作品として有名である。

『細雪』に登場する蒔岡姉妹が谷崎の実際の妻と義妹である松子夫人と重子、信子

* 東京大学大学院総合文化研究科 言語情報科学専攻 博士後期課程

がモデルとなって描かれており、テキストは作家谷崎の実生活が反映された作品であるという観点から主に取り上げられている。高田瑞穂(1979)は「松子との結婚によって果たされた美的生活の実現、その満足こそが、大戦中を「細雪」に没頭することの出来た何よりの支柱であったに違いない」¹⁾と述べており、幸子を「昭和十年代女性の美的理想像」²⁾であると指摘しながら、彼女が「潤一郎の三人目の妻松子夫人の風貌を見て誤りではない」³⁾と指摘し、さらに「作中の幸子の夫貞之助は、作者潤一郎の分身であることは言うまでもない」⁴⁾と断言している。「自伝的要素と風俗小説的要素を内蔵しつつ、全体として潤一郎の耽美主義の到達点を物語っている」⁵⁾とする高田の見解は「細雪論」の主な観点と言えよう。

『細雪』に関する研究は1949年から活発に行なわれており、多様な研究成果を遂げている。辰巳(富山)都志(1980)は「雪子に「肉体」感が稀薄」⁶⁾であるとして「「生活」や「情念」とも無縁」⁷⁾であると「「人形」像」⁸⁾として雪子を捉えている。このような身体に焦点を当てた分析は、谷崎文芸に置ける初期作品である『刺青』や『痴人の愛』との関連から論じられている。谷崎文芸の初期作品の傾向である悪魔主義・耽美主義と称される人間の官能性への追求が『細雪』にも表れていると論じられているのである。

また、『細雪』の執筆時期が『源氏物語』の訳業と重なっていることから、『源氏物語』の影響を受けていると指摘することで、『細雪』が古典主義による日本回帰の作品であるとする分析もある。これは、谷崎文芸の中期以降の作品である『春琴抄』や『蓼喰ふ虫』、『蘆刈』等から捉えられる古典主義に基づく日本の美意識への追求が『細雪』にも反映されているとする見解である。古典主義の作品としてテキストを分析する傾向は『細雪』を『源氏物語』だけではなく、『竹取物語』との関連からも論じている。

このようにこれまでの『細雪』研究の傾向は作家谷崎の実生活と文芸活動との関連から論じられてきた。もちろん、戦時下という「時流に流されぬ強烈な個性」⁹⁾を持っていると指摘する渡部芳紀(1978)の分析もあるが、コンテクストを取り上げながらも時流＝戦時中であ

1) 高田瑞穂(1979)「『細雪』を軸として」『国文学解釈と鑑賞』44(11), 至文堂, p.96

2) 前掲書, 高田瑞穂(1979) p.95

3) 前掲書, 高田瑞穂(1979) p.95

4) 前掲書, 高田瑞穂(1979) p.96

5) 前掲書, 高田瑞穂(1979) p.97

6) 辰巳(富山)都志(1980)「『細雪』の世界(二)——雪子像について——」『日本文芸研究』32(1), 関西学院大学日本文学会, p.42

7) 前掲書, 辰巳(富山)都志(1980) p.42

8) 前掲書, 辰巳(富山)都志(1980) p.42

9) 渡部芳紀(1978)「戦時下の体験」『国文学解釈と教材の研究』23(10), 学灯社, p.96

ると言及するに留まり、戦時中という時代状況を回避して執筆された作品であるという見解が主に述べられているのが現状である。このような見解は、無思想の作家であるという作家谷崎の評価からも影響されていると考えられる。「著者は大きな余白を読者の想像力にまかせようとはせずに、すべての重要な事件を正確に（時には幾つかの観点から）叙述しようと努力している」¹⁰⁾として、物語の日常における緻密な描写を評価したドナルド・キーン(1970)も、戦時中という状況との関連までは論じ得ていない。

作家谷崎の実生活に基づいた研究の傾向は、千葉俊二(1987)の「細雪論」によって変化が生じたのだが、「『細雪』は従来いわれてきたように決して伝統的な生活の様式美を描いた作品なのではなく、一時代ある階層に典型的な、それなりの調和のとれた生活様式の文学的定着化の試み」¹¹⁾であるという彼の理論は、『細雪』を「古典」としてではなく、「近代」の作品として捉え直すことを指摘している。日常における詳細な描写も「流れるような文体に不協和音を奏でるのが、詳細な日付けの記述」¹²⁾であるとして「日本史の同時代のあぶり出しの意味を与えた」¹³⁾とたつみ都志(2001)によって指摘されているように、『細雪』に関する研究は作家との関連性による分析から、作品自体の分析へとその傾向が主流になりつつある。千葉俊二(2008)はその後も物語時間に忠実にコンテキストを取り組んでおり、「蒔岡家の秩序だった安定が崩壊し、その三姉妹によって醸しだされる美の諧調が衰退してゆく過程」¹⁴⁾であると姉妹の日常における詳細な描写を新たな観点から捉え直している。このようにテキストを「近代」の作品として捉える新たな観点は、「近代」という時代背景へと焦点を当てることになる。

しかし、テキストの時代背景に関する研究が行われながらも、コンテキストと物語の関連性に関してはさほど焦点が当てられていないと考えられる。物語の背景が「近代」であると認識されながらも、背景が「近代」であることがテキストの進行においてどのような影響を与えているのかに関して論じられてこなかった。本稿ではコンテキストの分析をより詳細に行いながら、それが作品とどのような相互作用の中、物語が進行されているのかに関して論じたい。物語は1936年から始まって、1941年の太平洋戦争勃発の直前に終わるという設定で進行されている。本格的な戦時体制へと突き進む時代背景の中、蒔岡家の優雅な日常とは何を意味しているのか、そもそも優雅な日常とは実存したのかに関する考察を行うことで、物語の新たな読みを模索する。

10) ドナルド・キーン(1970)「古き日本の魅力—谷崎『細雪』評」『国文学解釈と鑑賞』35(5), 至文堂, p.115

11) 千葉俊二(1987)「『細雪』論」『国文学解釈と鑑賞』52(4), 至文堂, p.138

12) たつみ都志(2001)「『細雪』の生かれた時間と空間」『国文学解釈と鑑賞』66(6), 至文堂, p.138

13) 前掲書, たつみ都志(2001) p.139

14) 千葉俊二(2008)「谷崎潤一郎『細雪』の時間」『国文学解釈と鑑賞』73, 至文堂, p.123

2. 消滅された空間

テキストは蒔岡家の四姉妹の物語でありながら、これまでその根幹を成している「蒔岡家」の在り方に関しては看過されてきた。つまり、「蒔岡家」の存在は前提のものとして捉えられてきたと言えよう。しかし、実際には「幸子や雪子はその後も長く父の存生中のことを忘れかねて、今のビルディングに改築される前までは大体昔の俵をとどめていた土蔵造りのその店の前を通り過ぎ、薄暗い暖簾の奥を懐しげに覗いてみたりしたものであった」¹⁵⁾ことからわかるように、蒔岡家の船場の店舗は既に他人に譲渡されており、テキストにおいて船場に蒔岡家は存在していない。つまり、船場の店舗を持っていた昔の蒔岡家と今の蒔岡家は対比させられるかのように地の文において語られていることを念頭に置いて、テキストは読まなければならない。

自分の見たところでは、先方も祖父の代までは或る北陸の小藩の家老職をしていたとかで、現に家屋敷の一部が郷里に残っていると云うのであるから、家柄の点ではそう不釣合でもないのではあるまいか。お宅さんは旧家でおありになるし、大阪で「蒔岡」と云えば一時は聞えていらしたに違いないけれども、——こう申しては失礼であるが、いつ迄もそう云う昔のことを考えておいでになっては、結局お嬢様が縁遠くおなりになるばかりだから、大概なところで御辛抱なすってはいかががであろうか。¹⁶⁾

縁談による他者とのかかわりは当事者の立場を明らかにする作用がある。雪子に縁談の仲介する井谷は幸子に「昔のことを考えるな」¹⁷⁾と忠告している。「昔」とは、蒔岡家の「昔」のことである。「昔のことを考えるな」という忠告は、物語時間である「今」とは異なる「昔」の存在がテキストに内在していることを示唆しており、テキストを読むにおいて蒔岡家の時間の問題を浮上させていると考えられる。井谷によって蒔岡家は物語内容上の時間である「今」と、それに対比する形でテキストには存在するが物語内容においては「昔」になる時間という二つの空間として存在していることが示唆されているのである。

15) 本稿における『細雪』の引用の部分に関しては、中央公論社発行『谷崎潤一郎全集第十五巻』（昭和43年）に拠り、旧字体を新字体に改め、ルビを適宜省略した。

『谷崎潤一郎全集第十五巻』上巻, p.11

16) 前掲書, 上巻, pp.8-9

17) 前掲書, 上巻, p.10

「昔のことを考えるな」と云う井谷の言葉は、ほんとうに為めを思った親切な忠告なので、蒔岡の家が全盛であったのはせいぜい大正の末期までのことで、今ではその頃のことを知っている一部の大阪人の記憶に残っているに過ぎない。いや、もっと正直のことを云えば、全盛と見えた大正の末頃は、生活の上にも営業の上にも放縦であった父の遣り方が漸く祟って来て、既に破綻が続出しかけていたのであった。¹⁸⁾

上記の引用を見てみよう。「昔のことを考えるな」という井谷の忠告は、「蒔岡の家が全盛であった」昔を考えるなということである。この井谷の忠告の背景には「船場」の不在がある。つまり「昔」の蒔岡家とは、船場に「旧幕時代からの由緒を誇る」¹⁹⁾店舗があった頃であり、「今」の蒔岡家には、その空間が存在しない。

物語が始まる1936年の以前に、店舗と居住空間を別にするという当時の傾向によって、居住地は上本町に移っており、その後、船場の店舗は人手に渡っている。船場はテキストの空間として直接には登場していないことを指摘したい。物語の中で登場する「船場」という空間は昔の船場、つまり蒔岡家が店舗を所有していた頃とは異なる空間であり、昔の船場は不在の空間であることをまず念頭に置いてテキストの読みは行なわれなければならない。

「船場の出」であるという事実は、蒔岡家が「旧幕時代からの由緒を誇る」家柄であるとされる根幹となっていることから、その根幹に疑問を生ずることは、「御大家」であった蒔岡家の現状にも疑問が発生することになる。蒔岡家が存在し得ていた「船場」はあくまで昔の船場であり、テキストの物語時間には存在しない空間であることを看過してはならない。

しかし、物語時間には存在しない空間である昔の船場であるが、姉妹が「旧幕時代からの由緒を誇る」蒔岡家の出身であることにこだわるとい設定は、テキストを読むにおいてこの不在の空間を常に意識しながら読むことが求められていると考えられる。

3. 消滅の背景

物語は1936年から始まっているが、「旧幕時代からの由緒を誇る」船場の店舗を有していた蒔岡家が「全盛と見えた大正の末頃は」²⁰⁾すでに破綻しており、新たな当主となっ

18) 前掲書, 上巻, pp.10-11

19) 前掲書, 上巻, p.11

「旧幕時代からの由緒を誇る」という引用は本稿において、幾度使用している。この引用は蒔岡家を姉妹の父親の生前と死後に分けて語るという本稿の主旨に必要な引用であり、出典はここに記す。

た長女鶴子の夫である辰雄によって店舗を手放したという設定の中で物語が進行されていることから、物語時間以前の時代背景に焦点を当てる必要があると考えられる。まず、テキストの中で「全盛と見えた大正の末頃は、生活の上にも営業の上にも放縦であった」²⁰⁾という部分に注目したい。物語は1936年から始まっているが、実際には大正末期の長女鶴子の婚姻から始まっていると考えられる。

第一次世界大戦の勃発(1914年)によって、日本は戦時体制に突入した欧州の代わりに物資の生産拠点となることで好景気を迎えたが、1918年に戦争が終結すると過剰な設備投資と在庫の滞留が原因となって景気が悪化する。戦時中停止していた金輸出禁止の解除の時期を逸したために、日本銀行に大量の金が滞留して金本位制による通貨調整の機能を失い、政府・日銀ともに景気対策が後手に回ることとなる。また、関東大震災による京浜工業地帯の壊滅と緊急輸入による在庫の更なる膨張、震災手形とその不良債権化問題の発生など、景気回復の見通しが全く立たないまま昭和金融恐慌を迎えた。

大阪も金融恐慌の影響は受けたが、大阪の関西羅紗商協会は関東大震災により大阪商品を各地へ進出する機会を得てもいる。第一次世界大戦以降、大阪は全国第一の工業府県として君臨し続けたが、しかし、ヒト・モノ・カネの流れが人為的に動かされるようになった戦時期には東京にその座を譲ることになる²²⁾。旧幕時代に「天下の台所」として蔵屋敷が並び繁栄していた大阪であったが、明治維新後、銀目停止・蔵屋敷の廃止・株仲間の解散などの措置により不況に突入し、さらに戦時色が強まるにつれて、政府や軍によって重化学工業が推薦されることで、軽工業中心で中小企業の比重が大きかったことから、政府の指導の下、本格的な戦時体制に入った東京とは差が発生せざるを得なかった。

このような時期に発生している蒔岡家の店舗の経営破綻は銀行からの融資による投資の失敗も大きな原因となったと考えられる。蒔岡家の当主としては当然、更なる銀行の融資を模索したであろう。そしてそのための最も効果的な方法として身内に銀行員の参入を目論んだと考えて無理はない。長女鶴子の夫、辰雄は義父によって家督を受け継ぎ、新しい当主となるのだが、しかし、明治民法の改正によってこれまでとは異なる過程で新たな当主を得た蒔岡家には変化が発生することになる。

明治民法は、1898年に全面的に改正されている。親族・相続の2編の改正によって、

20) 前掲書, 上巻, p.10

21) 前掲書, 上巻, p.10

22) 宮本又次(1980)『大阪経済文化史談義』文献出版, p.69.

長男(男がない場合に長女——庶男子でも女子には優先する)の家督相続の権利および義務(すなわち一人娘は嫁にゆけぬ)、家督相続人がなくなることをふせぐ手段としての養子制度、他「家」からきた妻の権利(後見人になる権利、相続人となる権利)の制度、女性に対する男性の優位および支配、男子の血統の尊重等の諸原則が認められ²³⁾ることになる。それまでは行使できた家督相続における女子の権利が剥奪されることになったと言えよう。家督相続のためには、必ず男子の介入が必要であると国によって定められたのである。娘しかいなかった蒔岡家は家督相続の危機に陥ることになり、その打破のために、婚姻による養子の参入を行うことになる。蒔岡家の息子として当主となった姉妹の父親と、婚姻によって養子となることで当主となる資格を得た辰雄とは、その立場に差異があったと考えられる。

4. 家の消滅

昔の蒔岡家とは、「旧幕時代からの由緒を誇る」店舗が船場にあった頃の蒔岡家であり、姉妹の父親が当主として生存していた時期である。息子がいなかった姉妹の父親は、明治民法の改正によって相続が息子にのみ限定されるようになると、家の存続と店舗を継がせるために娘の夫として養子を取るようになる。蒔岡家の長女鶴子と結婚し、養子となることで、養父によって家督を譲り受けた辰雄は戸主となる。家督とは、旧民法で、戸主の身分に付随する全ての権利・義務を意味する。これによって戸主の地位が保証される。戸主となった辰雄は家族を統轄し、扶養する義務を負うことになる。家族を扶養する義務を果たさなければならないという正当性を法によって保証された辰雄は、しかし、蒔岡家に伝わる本来の生活手段を絶ち、銀行員としての業務に専念している。

「養父の家業を受け継いでからも実際の仕事は養父や番頭がしていたようなものであった」²⁴⁾ことからわかるように、辰雄は最初から船場の店舗の復興には積極的ではなかった。店舗の復興を望む養父と銀行員としての辰雄の思惑には相違があったと考えられる。養父の死後、辰雄は養父の期待とは異なり、「また何とか踏ん張れば維持出来たかも知れなかった店の暖簾を、蒔岡家からは家来筋に当る同業の男に譲」²⁵⁾っている。代々伝

23) 川島武宜(1983)『川島武宜著作集第十巻』岩波書店, pp.214-215.

24) 前掲書, 上巻, p.11

25) 前掲書, 上巻, p.11

わる家業を他人に譲渡することで、蒔岡家の家業は途切れてしまった。店を他人に譲った辰雄の行為は「旧幕時代からの由緒を誇る船場の店舗」の主としての行為ではなく、復興の可能性と利益の創出を緻密に計算する銀行員としての行為として捉えられる。このような辰雄の判断は蒔岡家が「船場」から離れる結果をもたらしている。大阪経済の中心地であった船場からの離脱は、蒔岡家の経済力を徹底的に剥奪することになる。

4.1. 東京への栄転

蒔岡家の本家として上本町に住んでいた鶴子たちであるが、物語が始まって間もなく、辰雄の東京転勤によって、鶴子たちは東京へ移住することになる。蒔岡家の本家として鶴子たちが上本町で暮した期間はテキストにおいてごく短期間に過ぎなく、東京の本家としての比重が圧倒的に長い。辰雄の東京転勤は姉妹にとって「意外な事」²⁶⁾であった。「八九年前に福岡の支店へ遣られそうになったことがあったが、その時は辰雄が、大阪の土地を去りにくい家庭の事情があることを訴え、月給は上らなくとも現在の地位に留っていたいと云う希望を述べて許して貰ったことがあり、銀行の方でも、それからは旧家の婿と云う辰雄の身分柄を考えてくれて」²⁷⁾いたのが、「一つには、銀行の重役級に移動があって方針が変わったせいでもあり、一つには、辰雄自身、今度は大阪を離れても地位の昇進を望む気持になっていたせいでもあった」²⁸⁾とする物語時間以前の状況との間に変化が生じていることがわかる叙述が行われているが、その原因として「経済界の変動や何かで、養父の遺産と云うものが以前のように頼りにならなくなって来たからであった」²⁹⁾と時代状況に関する言及がなされている。

当時の銀行は地域の有力者が銀行の経営に携わっていたりしており、適切な運営がされていたとは言い切れなかった。規制や制限もゆるかった。この時期、資産家が銀行を設立することや、資金に余裕のある私企業が銀行業を兼業することも行われた。そのことから、特定の企業へ融資することも多々あった。融資先が偏ることで後の昭和恐慌が起きる一因になったのである。

大阪の銀行は東京の銀行とは異なって、1923年の関東大震災の影響は少なかったものの、その前年には相場師石井定七の株式投機の破綻という大事件による金融的混乱に見

26) 前掲書、上巻、p.158

27) 前掲書、上巻、pp.161-162

28) 前掲書、上巻、p.162

29) 前掲書、上巻、p.162

舞われていた³⁰⁾。大阪の銀行の近代化は容易ではなかった。当時の銀行は預金吸収よりも、自己資本の充実と日本銀行の預金獲得とに力を入れており、貸付に関しては旧両替商の伝統を継承して信用貸し(素銀)を本流とし、商品担保による貸付(並合)を蔑視したといわれる。このような銀行経営はしばしば情実貸しや、銀行家が経営する別事業への融資をもたらし、さらに銀行の破綻を招くことが多かった。いわゆる機関銀行の弊である。この点の克服は後々まで容易ではなく、1927年の金融恐慌までそれが続いた銀行も少なくなかった。

「銀行の重役級に異動があつて方針が変わつた」³¹⁾のはこのようなコンテキストが反映されていると考えられる。八九年前に福岡の支店への転勤が命じられたのがちょうど昭和恐慌と重なるか、その直後となる。その後不況が続くことによって、これまでのように「旧家の婿」として配慮を受けることが徐々に難しくなつていつたと考えられる。昭和金融恐慌の影響で国民は小さな銀行に預金を預けては危ないと思ふようになり、財閥系などの大銀行に対して預金を預けるようになっていた。そのため、大銀行(特に三井・三菱・住友・安田・第一銀行を指す。これらは五大銀行とも呼ばれる。)に預金が集まるようになり、財閥の力はさらに強化された。また、大銀行に資金が集中することで、地方の小さな銀行は衰退に追い込まれることになる。そして経済は大銀行、財閥、帝都に集中することになり、辰雄の東京への転勤が「栄転」とされる背景には、昭和恐慌後の不況による状況の変化が示唆されているのである。

4.2. 本家の移住

今度義兄が、東京の丸の内支店長に栄転するについて、近々本家は上本町を引き払い、一家を挙げて東京へ移住しなければならなくなつた、と云うのである。…中略…ほんとうに、その人達の云う通り、これが遠い外国とか、交通不便な片田舎へ遣られてもすることか、東京のまん中の丸の内へ勤務することになって、勿体なくも天子様のお膝元へ移住すると云うのに、何が悲しいことがあろうと、自分でもそう思い、われとわが胸に云い含めているのだけれども、住み馴れた大阪の土地に別れを告げると云うことが、たわいもなく悲しくて、涙さえ出て来る始末なので、子供達にまで可笑しがられているのだと云う。³²⁾

30) 阿部武司(2006)『近代大阪経済史』大阪大学出版会, pp.174-175, 177

31) 前掲書, 上巻, p.162

32) 前掲書, 上巻, pp.158-159

辰雄の東京丸の内支店への移動が「栄転」である根拠は、彼が「東京のまん中の丸の内へ勤務することになって、勿体なくも天子様のお膝元へ移住する」³³⁾からである。帝都である東京への移動が辰雄にとって「栄転」であるとされているのである。しかし、これは蒔岡家にとっても「栄転」なのであろうか。鶴子は夫辰雄の「栄転」によって暮しなれた大阪の上本町を離れ、東京に引っ越さなければならなくなる。総領娘であった鶴子は、辰雄との結婚によって(辰雄が養子になる形の結婚であったにもかかわらず)、「旧幕時代からの由緒を誇る」蒔岡家の総領娘から一銀行員の妻へと立場が変更せざるを得なくなっている。そしてこの立場の変化は東京移住によって決定的なものとなってしまふ。

まず、辰雄の東京丸の内支店への移動という出来事に注目したい。「天子様のお膝元へと移住する」ことから辰雄の東京移動は「栄転」とされるのであるが、彼が移動になる場所が東京の丸の内支店であることを看過してはならない。本社ではないのである。東京の丸の内の店舗が支店であるということは、本社は東京ではない可能性がある。つまり、東京への移動自体は「栄転」なのかも知れないが、支店への移動は決して「栄転」ではないのである。

東京へ引っ越した後の鶴子の境遇は家来筋に当る音やんの忤である庄吉から「東京の借家普請と云うものは大阪のよりは遥かに粗末で、殊に建具が悪く、襖などがとても安手でひどい」³⁴⁾と酷評されるほどみすばらしく、蒔岡家の本家としての名残を留めていない。蒔岡家の総領娘である鶴子のこのような没落は蒔岡家の没落を象徴する。そしてその没落を決定的なものとしたのは他にもない鶴子の夫であり、蒔岡家の当主である辰雄なのである。

東京に移住することで、大阪の上本町の本家は消滅してしまった。東京での蒔岡家はもはや「由緒ある家柄」ではない。知っている者もない東京で、台風にも壊れる脆弱な「安普請」に居住する住民でしかなくなってしまった。東京の本家と芦屋の分家という構造に新しく構築された関係性の中で鶴子は蒔岡家の本家としての、そして蒔岡家の総領娘としての地位を保持出来ていない。三人の妹が舞台を見に行くのに取り残されて涙を流す鶴子の姿がテキストで彼女が登場する最後の姿なのだが、大阪の蒔岡家の長女から、東京の一銀行員の妻へと転身して鶴子に対して妹たちの反応は冷淡でさえある。

そもそも鶴子は蒔岡家の総領娘であり、四姉妹の長女であるにもかかわらず、テキストの中で登場する場面は少ない。物語の進行において早い段階で東京へ移住させられてお

33) 前掲書, 上巻, p.159

34) 前掲書, 上巻, p.182

り、物語の最も大きな軸である雪子の縁談の出来事においても大きな影響力を与えられていない。長女である鶴子におけるこのような設定は蒔岡家の存在を前提としてテキストを読むことを否定していると考えられる。同じ蒔岡家の出身でありながら東京に移住することで、鶴子は他の姉妹とは異なる状況に置かれている。蒔岡家の姉妹の物語としてテキストを一律に読むことは、このような設定を看過していることになる。

4.3. 残された分家

物語の最も大きな軸である雪子の婚姻に至るまでの出来事は次女である幸子によって執り行われている。幸子もやはり父親の生前に貞之助と結婚して分家になっているのだが、その夫である貞之助は「厳格一方の本家の兄と違って、商大出に似合わず文学趣味があり、和歌などを作ると云う風であったし、本家の兄のような監督権を持たなかったし、いろいろの点で雪子たちには、そう恐くない人」³⁵⁾であった。しかし、本家が東京に移住することで実質上の雪子と妙子の保護者となることで、その立場が変化している。

貞之助の立場の変化を語るに置いてまず考慮しなければならないのは彼が「本家の兄のような監督権を持たない分家の立場であるということである。幸子との結婚後、貞之助は幾分かの財産を分けてもらい、分家になっている。分家とは、戸主が行使できる権限のうちの一つである。森寛は「制度上の戸主権とは、一個の包括的家長権ではなく、「家」の統制者たる戸主が戸主たる身分を前提として、その身分に基いて有する権利の総体である。たとえば、(1)「家」の変動に対する同意権(七三七条など)、(2)家族の居所指定権(七四九条)、(3)家族および前家族の身分変更に干渉する権利(七五〇条など)、(4)家族および前家族を「家」から絶縁する権利(七五〇条など)、(5)家族の後見人または保佐人となる権利(九〇三条など)、(6)親族会に関する権利(九四四条など)がそれである。これら戸主権は「契約は勿論親族会の決議を以てするも其権利を左右し得べき性質のものにあらず」というような、強大な権利とされてきた。しかし、「家」制度の中核としての戸主権の絶対的思想は、判例上次第に弛緩していった。とくに、戸主の有する諸権力のうち、居所指定権はもっともはやくからその濫用が問題とされた」³⁶⁾と言及している。テキストの冒頭に雪子と妙子が「上本町九丁目の本家から、阪急芦屋川の分家、——幸子の家の方へ、前から始終、一人が帰れば一人が来ると云う風にして、代る代る泊りに来ていたのが、この事件を切掛けにして段々頻繁になり、二人が一緒にやって来て半月も

35) 前掲書、上巻、p.16

36) 福島正夫(1984)『家族：政策と法近代日本の家族政策と法』東京大学出版会、pp.234-235、p.244

泊り続けることがあるようになった」³⁷⁾と記されている蒔岡家の現状は、義父から家督を譲られ、新しく戸主になった辰雄が正常に戸主権を行使できていない状況を示していると考えられる。このように戸主でありながら戸主としての権限を行使できない辰雄が東京へ移住することで、蒔岡家は「戸主の不在」状態に陥る。その「戸主の不在」状態の中で貞之助の立場の変化が行われていると考えられる。

物語の進行の中で貞之助の立場が徐々に前面に押し出される模様はこの戸主権が崩壊される過程を表していると考えられる。民法第四編の(旧)第二章に関する判例のうち、とくに大正期以降は分家関係事件が戸主権関係事件に次いで多い。分家は一に戸主の同意にかかっているので、分家の問題は同時に戸主権の問題でもある。分家問題において、「家」制度の矛盾・破綻がその極に達したといえる。³⁸⁾次女である幸子を(貞之助と結婚させ、彼を養子にして)分家させたというテキストの設定は作者がこの戸主権の問題を常に意識して物語を読むことを読み手に提示していると考えられる。辰雄が東京に移住することで物語は「戸主の不在」の中で進行される。物語の進行から除外される形になった辰雄に代ってその位置に立ったのが貞之助なのである。

「戸主の不在」の中で「いろいろの点で雪子たちには、そう恐くない人」³⁹⁾であった貞之助は「そう怖くない人」とは相反する行動を見せている。それは貞之助が雪子の縁談をなりたせようと四回目の縁談の相手である橋寺に接触する際によく表れている。貞之助は橋寺に二度手紙を書いているのだが、最初の手紙に「義妹が今日迄結婚出来なかったのは、彼女を取り巻く一家一門の者共が、大した家柄でも何でも無いのに格式とか由緒とか云うことを口にして、良い縁談を皆断ってしまった」⁴⁰⁾として、結婚が遅れたのには雪子の非があるのではないと説明しながらも、その非が「彼女を取り巻く一家一門の者共」にある、つまり「旧幕時代からの由緒」に拘っている蒔岡家という家柄にあるとして、「旧幕時代からの由緒」を誇っている蒔岡家の否定を行なっている。また、この縁談が破談になった後にも橋寺への手紙で「あの妹をああ云う時代後れの女に育てたのは家庭の驕方が悪かった」⁴¹⁾とあくまで「時代後れの」蒔岡家にその責任があると非難している。このような貞之助の態度は蒔岡家の一員であり、さらに蒔岡家の「戸主の不在」を埋める立場にありながらも、「旧幕時代からの由緒を誇る」蒔岡家とは異なる立場にいることを示していると考えられる。

37) 前掲書、上巻、p.16

38) 前掲書、福島正夫(1984) p.244

39) 前掲書、上巻、p.16

40) 『谷崎潤一郎全集第十五巻』下巻、p.674

41) 前掲書、下巻、pp.696-697

残念ながら小生は、彼女が落第したことをハッキリと認めざるを得ない者で、もはやこの問題について貴下の御再考を懇願する鉄面皮は持ち合せない。42)

また、貞之助は雪子が橋寺との縁談において「落第」せざるを得ないと、橋寺への手紙で認めることで、雪子が橋寺との縁談において許可を願う「受験者」の立場であることを認めている。雪子の縁談が上下関係において「下」の立場にあることをその保護者の立場にある貞之助が認めることで、「旧幕時代からの由緒を誇」っていた蒔岡家の立場は決定的に「下」の立場に置かされることになったと考えられる。「戸主の不在」という蒔岡家の現状が姉妹の父親が戸主であった時とは異なることをその不在を埋めている立場の人物である貞之助が認めることで、「戸主の不在」状態の蒔岡家は昔の蒔岡家とは異なるという認識は決定的なものとなるのである。

新しく東京に構えた本家は上本町の本家とは異なる存在として捉えられなければならない。上本町の本家と芦屋の分家という構成の中で存在していた蒔岡家は、本家の東京への移住によって消滅されてしまったと考えるべきである。東京の本家と芦屋の分家という構成によって新たに構築された蒔岡家は異なる存在としてテキストの読みは行なわれなければならない。

5. まとめに

『細雪』は長編小説としての膨大な量もさることながら、「大谷崎」と称された作家谷崎潤一郎が戦時中という極限の状態にも関わらず執筆続けた作品として、これまで数多くの研究者によって分析が行われてきた。本稿ではこれまでの研究を詳細に分析することで、『細雪』に関する考察は『細雪』のみを対象にして行われたのではなく、主に作者の実生活との関連性や作者の他の作品との影響から論じられてきたことがわかった。

そこで本稿では、作者の実生活や他の作品の存在は取り上げず、作品にのみ注目することで、新たな読みの可能性を試みた。作者の実生活や他の作品の存在から離れ、コンテキストにのみ忠実に物語の読みを行うことで、これまでは確定した事項として看過されてきた「蒔岡家」という存在に対する疑問が発生した。

これまでの『細雪』に関する様々な分析は、蒔岡家の姉妹をその論点の対象としている。つまり「蒔岡家」という家の存在は、当たり前存在する概念として取り扱われてきたの

42) 前掲書, 下巻, p.696

である。しかし、テキストの構成において物語時間以前の出来事が取り上げられていることは、姉妹の父親の死後の物語としてテキストを論じるにおいて、父親の生前との区別が求められていると考えた。それは父親の死後、蒔岡家に変化が発生しており、その変化には、民法の改正による影響、昭和恐慌における不況など、コンテキストが色濃く反映されているからである。

物語は本格的な戦時体制に突入するコンテキストの上に描かれている。それは、戦時中になるにつれて消滅するであろう日常の記録とも言えよう。確定した概念としての「蒔岡家」ではなく、時代の変化によって消滅させられた「蒔岡家」に関する分析は、それまでの価値観のゆらぎを発生させると同時に、文化として存在していた日常がどのような過程で消滅させられたのかに関する提示になると考える。本稿は、『細雪』の分析における一部分に過ぎない。しかし、最も根本的な概念としての「蒔岡家」の存在に対して捉え直すことで、これからの『細雪』論を展開するにおいてその礎になると考える。

【参考文献】

- 阿部武司(2006)『近代大阪経済史』大阪大学出版会, pp.174-175, 177
 川島武宜(1983)『川島武宜著作集第十巻』岩波書店, pp.214-215
 高田瑞穂(1979)「『細雪』を軸として」『国文学解釈と鑑賞』44(11), 至文堂, pp.94-104
 辰巳(富山)都志(1980)「『細雪』の世界(二)——雪子像について——」『日本文芸研究』32(1), 関西学院大学日本文学会, pp.39-48
 たつみ都志(2001)「『細雪』の生きられた時間と空間」『国文学解釈と鑑賞』66(6), 至文堂, pp.136-143
 千葉俊二(1987)「『細雪』論」『国文学解釈と鑑賞』52(4), 至文堂, pp.131-143
 ــــــــ(2008)「谷崎潤一郎『細雪』の時間」『国文学解釈と鑑賞』73, 至文堂, pp.117-124
 ドナルド・キーン(1970)「古き日本の魅力—谷崎『細雪』評」『国文学解釈と鑑賞』35(5), 至文堂, pp.115-116
 福島正夫(1984)『家族：政策と法6近代日本の家族政策と法』東京大学出版会, pp.234-235, 244
 宮本又次(1980)『大阪経済文化史談義』文献出版, p.69.
 渡部芳紀(1978)「戦時下の体験」『国文学解釈と教材の研究』23(10), 学灯社, pp.92-96

논문 투고 일자 : 2018. 05. 31. 논문 심사 일자 : 2018. 07. 31. 게재 확정 일자 : 2018. 08. 03.

 < 要 旨 >

 『細雪』論
 — 消滅する文化 —

姜智允

本稿では谷崎潤一郎の長編小説『細雪』に関する考察を行った。蒔岡家の姉妹の優雅な日常を詳細に描いた作品として評されているテキストを、コンテキストに焦点を当てて読み直すことを目的とした。テキストにおいて物語の時間以前の出来事が重要な事項として描かれていることから、本稿では、姉妹の父親の死後、蒔岡家がどのように変化したのかに関して焦点を当てた。新たに当主となった養子辰雄によって、「旧幕時代からの由緒を誇る」船場の店舗を他人に譲渡され、辰雄の東京転勤によって上本町の本家が消滅することで、テキストにおける蒔岡家は、物語時間以前の父親が生存していた頃の蒔岡家とは異なる空間になってしまった。『細雪』は三女雪子の縁談の出来事が軸となって物語が進行しているが、蒔岡家の当主として三女雪子の縁談に取り組むべき辰雄が実は蒔岡家を消滅させた張本人であり、辰雄の代わりに保護者としての立場に置かれた貞之助もやはり、蒔岡家を否定する立場であることから、雪子の縁談の物語はこれまでとは異なる視点で読まなければならない。確定された存在としてではなく、変化する対象として「蒔岡家」を捉えることで、これまでの分析とは異なる新しい読みが可能になる。

 “Sasameyuki” Theory
 -the culture that be destroying-

Kang, Ji-Yoon

This paper studies Junichiro Tanizaki's novel "Sasameyuki (The Makioka Sisters)". I aimed to reread texts that were described as works depicting the elegant everyday life of the Sisters of the "Makioka family" focusing on context. In consideration of that events before the time depicted in the story of texts were described as the important points, this paper focused on the changings of the Makioka family after the death of the sister's father. Tatsuo, an adopted son-in-law who became the new family head, transfers to another person their office in Senba "which makes a boast of the past from the Tokugawa period." A main house in Uehonmachi was destroyed by Tatsuo transferred to Tokyo. The Makioka Family in context of texts became a different household from the Makioka family when the sister's father was alive. "Sasameyuki" is progressing with the event of Yukiko(the third daughter)'s marriage proposal as the axis, but Tatsuo who should deal with the Yukiko's marriage proposal as the family head of the Makioka Family, becomes the author who destroys the Makioka Family. Teinosuke who becomes a guardian instead of Tatsuo is still in a position to deny the Makioka family, so the story of the marriage proposal of Yukiko has to be read as being different from the past. By considering the "Makioka family" as a changeable subject rather than as a confirmed existence, a new reading different from the previous analysis becomes possible.